

熊本市都市政策研究所が目指すもの

熊本市都市政策研究所長

蓑茂 壽太郎

熊本市都市政策研究所の所長に、この度就任いたしました蓑茂でございます。今日は、簡単にご挨拶をと思いますが、黒川洸先生に特別講演をお願いしておりますので、その前座として20分ほど、この研究所が目指す方向についてお話をさせていただきますと思います。

今、幸山市長からお話がありましたとおり、政令指定都市になったことについて、色々な期待があります。しかし多くの都市学者は、大都市になることには、同時に不安があると言っています。期待にどう答え、不安をどう解消していくかという事を含め、研究所に課せられた使命は誠に大きいと感じています。この研究所は、政令指定都市熊本市にとって「必要な組織」として設置されました。これを、「どうしても必要な」組織としていくのが私、あるいは研究所の使命だと認識しております。その「どうしても必要な」組織にするためには、いくつか取り組むべきポイント、あるいは姿勢があると思います。

一つは、熊本市は日本で20番目の政令指定都市になりました。昭和31年に最初の5都市が政令指定都市になり、その後順次加わって、先頭車両からずらり並んで最後尾の20番目の車両として熊本市が加わったと表現できようかと思います。そして、私の見方でいきますと、この列車は経済大国という駅に着いたのだと思います。車両は、今度は引き返すこととなります。そうすると最後尾の車両が先頭になります。今後は、経済大国から生活大国に向かう列車になったと。その時に熊本市は先頭で走ることとなります。これまでですと先進事例に学びながら、決められた規則に沿っ

てやればよかった。つまりルールドライブでよかったのですが、それだけでは十分でなく、いわば自ら使命を定めて走る、ミッションドライブが不可欠になったということです。自分達で使命を探しながら、新しい方向に向かっていか

なくては行けないと。そういう日本の新しい都市時代のフロントランナーになるのが熊本市ではないかというのが、一つです。

それから、二つ目には、九州は東アジアのゲートウェイと盛んに言われております。九州には、福岡、あるいは北九州市という先発の政令指定都市がありますので、熊本は九州で3番目になるわけですが、その時に、九州は東アジアのゲートウェイですから、ここは国境に近く、境界でもありますが、同時に境界には交流の拠点ができると。そういう意味を持たせて九州の政令指定都市としての役割を果たしていかななくてはならないと思います。それから、もう一つは、九州アイランドの中で見ていきますと、九州の真ん中が熊本ですから、南北の縦軸方向の連携、と共に東西横方向の長崎・大分との連携。そういう縦横連携の拠点としての都市、を考えないといけないと思います。

このように新しい都市社会・日本での役割、東アジアでの役割、九州での役割というものを熊本に重ねて都市政策を考えることとなります。そして社会がどんどん変化しておりますので、その社会の変化というものに対応して進化する組織。そういう組織でないと「どうしても必要な」研究所であり続けることができないと思います。

研究所の具体的な使命として、調査研究・人材育成・情報の発信という3つを掲げております。

調査研究で力を入れたいのは、これまでの単なる施策を執行するだけのものではなく、政策課題の発見や政策立案に役立つ研究を進めます。より優れて科学的アプローチが行政にも必要であろうと考えます。従来の経験知だけではなくて、これを形式知にしていくことも、この研究所の使命だと考えております。

人材の育成に関しましては、先ほどの政策立案能力とも深くかかわりますが、いろんなことを主体的にできる人材をつくっていくということです。情報の発信につきましては、発信をすることによって情報が集まるという組織にしていきたいと思っております。これを3つの輪で表現しますと、調査研究・人材育成・情報発信ということになります。

従来はこういった組織がそれぞれ独立して3つの核となり、私は人材育成を担当します、私は調査研究を担当します、私は情報発信を担当しますというものであったのですが、この研究所は、沢山のスタッフがいるわけではありませんので、束になって組織が出来ていくような形で持っていこうというのが私のアイデアです。ですから、うちのスタッフはマルチスタッフでして、それぞれが専門で行くのではなく、3つのことを同時にやりながら一丸となって進めていくことを、この研究所で試行したいと思いです。

研究所では、私は非常勤の所長でございまして、他に副所長、主査、参事、主任主事、主任技師など、市役所の職員が現在6人配置されています。その他に登録研究員というのを12局1委員会から各2名、計26名を出していただいております。ここが先発の政令市にある類似の研究所とは違うところで、研究所という一箇所に人を単に集めるのではなくて、庁内の全ての中に登録研究員を置くということです。これにより研究所情報のやり取りをしながら日常の仕事の中でも活かすやり方です。少しタイトに思われるかもしれませんが、登録研究員となることで研究体験も出来るという風

に捉えていただけたら、それで十分だと思います。これにより新しい風を熊本市役所に入れることができたと思うわけです。

それだけではなく、今後は専門性が求められる可能性が高いわけですから、これについてはいずれ連携研究員制度を考えたいと思います。地域の大学であるとか、国内外の大学にお願いをして進めることを構想しています。こうした考えの下、大組織ではありませんが、この研究所が都市政策にとって一定の中核機能を持つことをイメージしています。

それでは、当研究所の取り組みの具体を紹介したいと思います。

一つは役に立つ調査研究というもの。もう一つは魅力ある研修です。今日の黒川先生によります特別講演も市役所職員はもとより、市民の研修の機会と位置付けています。このような研修を時期を見て開催し、これを情報発信にもつなげたいと思っています。

一つ目の役に立つ調査研究につきましては、スタートアップ研究として2つの研究をすでに設定しました。一つは、熊本市域、合併等で形も変わってきておりますことから、熊本市という地域を認識する調査研究です。そしてもう一つは、熊本市の都市政策の歴史を振り返り、時代認識がきちんとできるような市職員であってほしいと思ひまして、これに資する共有情報となりえるような系統的な研究であります。

何故、この2つの研究を考えたかと申しますと、政策立案をするためには、創造性が極めて重要です。クリエイティビティですが、私は、クリエイティブなことをやるためには、イマジネーションが勝負だと思っております。創造に並んでもうひとつの想像です。イマジネーションに結びつくような地域認識と歴史認識に関する内容でこの研究所立ち上げ期の研究とすることによって、熊本市の政策を立案する、あるいは、熊本市の街づくりのコンサルタントをする方に、そういう基礎とな

る研究をきちんと踏まえてやっていただく。その基盤を作りたいわけです。

それから、研修につきましては、1 つは、都市政策の基本理解に関わる研修、少子化であるとか高齢化などと都市政策とのかかわりなどを学べるようにします。それから政令市には大都市圏がつきものですので、熊本市域だけではなくて周辺の市町村も含めた自治体の方にも参加していただけるような大都市圏の政策を考えるのに役立つ研修を組み込みたいと思っています。3 つ目には、熊本県全体の基礎自治体の地域力の向上にもこの研究所が寄与すべきだというご意見がありますので、地域政策課題に関わる最新事情が聴ける講演会も企画します。

調査研究に戻りますと、一つ目の地域認識に関しましては、市役所内に現在保存されている古い図面ですとか、あるいは県立図書館や市立図書館などに収められた歴史的資料、加えて地域の大学等に収蔵されている地域理解に役立つ図面類に関心を示しています。例えば大正時代の熊本市街地図と、現在とを比較してどう違うのか。一つ一つ地図を読み取る中で、皆で熊本市はこういう町なのだ、こういう発展をしてきたのだ、とわかるような共有材料が提供できたらと思います。歴史資料として大事に保存されているものを、これからは行政の中で「見える化」することによって、使える資料にする。これを眺めることでイメージが沸く、イマジネーションにつなげていく。そういう考えです。

なお、古いものだけに関心を示しているわけではありません。例えば熊本の夏は非常に暑いわけです。風の道という概念もありますので、ランドサットのデータを使いながら、土地利用がどうなっているのかを調査分析します。最新の技術を使って、新しい現代のツールを活かしての議論が出来るようにしたいと思います。

もう一方の時代認識ですが、これにつきましては、熊本市のまちづくり年表を作る中で、例えば

今年は熊本市が誕生して 123 年になるわけです。

1.2.3 という並びの年なのですね。そのように、今年はどういう年なのかということが、誰でも知れるように、確かに熊本市には様々な年表がありますが、それをもう少し系統化して課題別年表や分野横断の年表を作っていきたいと思っております。これにより特定の時代の熊本が語れるようにしたい。たとえば明治 29 年というのは、夏目漱石が熊本を「森の都」と表現した年ですが、その前後がどうだったのかということを見ていくと、例えば明治 22 年に全国で 30 の市が成立しましたが、その一つとして熊本市制が採られた年。あるいは、明治 30 年に市区改正事業に着手したというようなこと。東京市区改正が明治 21 年になされていますが、それからさほど遅れないで市区改正事業が熊本で行われたということです。そういうことを知る中で、時代認識を間違えない都市政策を展開できるようにしたいと思います。こういうことをそれぞれの部局に戻りますと、保健行政がどうだったのか、教育行政がどうだったのか、ということを知ることができます。そういった事を登録研究員の方にやっていただきたいと思います。

その他、これは私の専門ですが、熊本初の公園として下河原公園というのがあった。後に中央公園と呼ばれます。セントラルパークですね。しかし、白川の河川改修によって無くなった公園です。ご覧の図面の中で、ここに辛島のロータリーがあります。この一帯の地図を眺めていくと、地歴といえますか土地の履歴、どういう土地だったのかということがわかります。そういったことを十分認識したうえで、街づくりのコンセプトが作られるわけです。ただ、そういう材料があまりにも知られていない。これをどんどん熊本という街について、表に出していこうということです。下河原公園では、人造温泉があったと。そこでは、お茶屋がありお弁当が出ていた。そういうテーマパークがあったということです。過去を振り返りながら、次の時代を発想する。その材料を研究所が

くるということです。

私を知るだけでもいろんなトピックがあります。北村徳太郎という東京緑地計画を戦前の昭和7年から14年の期間に作った方が、その直前の昭和5年に熊本にきています。ついでに江津湖を見学し、江津湖は将来こうあるべきだという将来像を描いています。これが都市公論という雑誌に載っていますが、これが今はなかなか目にすることができません。こういったものを表に出して今読み返せるようにしたいということです。そういうことを繰り返すことによって、地域認識、時代認識を進めていく。その素材を提供するのが、当面のこの研究所の使命です。

繰り返しますと、これまではある一つの法律や事業があつて事業を執行することによって公共サービスが出来たわけですが、これからはそれだけでは十分でなく、新しい公共という言葉にもありますように、市民であるとか事業者が担うまちづくりが重要です。そのためにはどんどんこういった情報を表に出していこうと。そういう情報を発信する事が重要であると考えます。

また、こういう研究を行政にいる人が一度でも経験することによって、創造力のある人材として育っていくのではないかと期待しています。この研究所は、現在5、6人の組織ですが、広げ方によっては、市の職員全員を何らかの研究員ととらえることも可能でして、そのような気持ちでやっていいのではないかと思います。小さく産んで大きく育てようというのが、私の心境です。私も6年間熊本で生活しましたので、熊本の街歩きは随分しましたので、非常勤ではございますが心は常勤ということで一生懸命がんばります。今日お集まりの皆さんには、引き続きご指導ご鞭撻の程お願い申し上げまして、挨拶並びに研究所発足の話とさせていただきます。どうもありがとうございます。



熊本市都市政策研究所 所長 蓑茂 壽太郎